2019年10月28日（月）

龍谷大学
田中正弘（筑波大学）

英国における大学運営への学生参画と日本への示唆

目次

- 「学生参画」の目標
- 「学生参画」の定義
- 英国における学生参画
- 日本における学生参画
- 日本への示唆

「学生参画」の目標

- 「学生参画」の目標は，各学生の「所属意識」（a sense of belonging）を醸成し，互いに共有することである（Brand and Millard 2019）。
  - 所属意識の高い学生は，自らの大学を，「うちの大学」と呼びます。
  - 低い学生は，「この大学」と呼びます。

出典：Brand, Stuart and Millard, Luke (2019) “Student Engagement in Quality in UK Higher education, More than assurance?”, in Masahiro Tanaka, *Student Engagement and Quality Assurance in Higher Education, International Collaborations for the Enhancement of Learning*, London: Routledge, 35-45.

印象的な学生

- 札幌大学の「札大おこし隊！」という学生FD組織の訪問調査の際に，印象的な男子学生と出会った。
  - 彼は奇抜な服装であったが温和な好青年に見えた。
  - ところが，他のメンバーによると，1年生の頃の彼は髪を金色に染め，目つきが殺気立っており，とても話しかけられる姿ではなかったそうである。
- 彼曰く，「当時は大学に居場所がなく，全てがつまらなかった」とのことで，学生FDに出会えた（つまり，他者に必要とされる＝所属意識を持てた）ことは，彼にとって人生の転換点だったのかもしれない。

出典：田中正弘（2018）「日本の大学における学生参画―質保証への参画を中心として―」『大学研究』45，17-29頁。

「学生参画」の定義

学生参画の定義

- 所属意識を高める「学生参画」(student engagement)とは，どのようなものであろうか。
- この用語の意味は実に多様である。
  - 具体的に，誰が(who)，どこで(where)，何を(what)，いつ(when)，どんな目的で(why)，どのように(how)実行すべきなのかが，各国で大きく異なるためである。
- そこで，先行研究における学生参画の定義を確認したい。

クーの研究

- 「学生参画」に関する著名な研究の一つは，「全国学生調査」（NSSE）を開発した，クー（George Kuh）の研究成果である（Kuh 2001）。
  - この研究は，1960年以降に主にアメリカで蓄積されてきた，カレッジ・インパクト研究の集大成といえる。
  - 彼が強い影響を受けた先行研究は主に三つある。
    1. サンフォード（Nevitt Sanford）による，学習環境の研究
    2. アスティン（Alexander Astin）の「学生発達論」（Student Development Theory）
    3. チッカリング（Arthur Chickering）とガムソン（Zelda Gamson）の七つの行動規範

クーの定義

- クー（2009: 683）の定義によると，
  - 「学生参画」とは，①大学の期待する学習成果に経験上つながると思われる活動に学生が費やす時間や努力のことである。また②学生がそれらの活動に参加するように大学が仕向けることでもある。

注：丸数字は発表者が付加した。

- ここで興味深いことは，①の量と質を担保するのは大学の責務だと，②で明示していることである。
  - その一方で，学生には義務や責任を求めていない。

学生参画実施の責務

- 「学生参画」の実施は，
  - 学生に求めるべき責務なのだろうか，
  - それとも，大学に求めるべき責務なのだろうか，
  - あるいは，双方に求めるべき責務なのだろうか。
- そこで，「学生参画」の責務の所在を，学生を弟子，顧客，パートナーのいずれと見なすかという観点から，考えてみたい。

弟子と見なす場合

- 学生を弟子（研究者の卵）と見なす考え方は，フンボルト大学誕生以来，多くの国の大学で支持されてきた。
  - フンボルト理念を継承した大学では，教員は自らの研究成果を自由に教える権利（教授の自由）を保証されるために，教員はカリキュラムの全体像に関心を持つ必要はなく，自らの教育方法に疑問を持つことすらなく，まして学生が教育方法の改善を働きかけることなど失礼なことだとされた。
- このような状況下では，「学生参画」を推進する責務が大学にあるという認識は広まりにくく，教育改善に参加する権限が学生に与えられることも考えにくい。

顧客と見なす場合

- 学生を顧客と見なす考え方は，学費導入・高騰を通して，高等教育の商業化が進んだ国で提唱された（Maringe 2011）
  - 商業化の進む国では，学生に満足感を与える教育を提供できない大学は，学生の流失により，競争の中で淘汰されやすい。
- 従って，学生の要望や期待を知るために「学生参画」を遂行することは，大学の（生き残りをかけた）責務となる。
  - ただし，情報を提供しなければならない義務は学生にはない。
    - 事実，授業評価アンケートの回答率低下などが多くの国で見られる。

パートナーと見なす場合

- 学生をパートナーと見なす考え方は，大学は教員，職員，学生という三者による「三者自治」が確立している，北欧諸国などで早くから定着していた。
  - 現在は，ボローニャ・プロセスに学生を取り込むようになるなど，特に欧州の国々を中心に，政策的後ろ盾を得られる考え方となった（Levy, et al. 2011）。
- パートナーに位置づけられた学生は大学の意思決定に関わる権利を与えられることになるが，同時に，教育の改善・評価・支援への協力が義務づけられるのに加え，その結果に対する連帯責任を負うことも意味する。

注：とはいえ，学生は成長過程にある大人として扱われるべきであり，信頼を持って任せられる業務は，ある程度，限定されると思われる。

「学生参画」の目的

- 「学生参画」の責任の所在だけでなく，その目的を論じることは，学生参画の理解に欠かせない。
- そこで，「学生参画」の目的を，ヒーリーほか（Healey, et.al. 2010: 22）の3分類に従い，考察してみたい。
  - ミクロ：学生個人や他の学生の学修活動への参画
  - メゾ：質保証・向上プロセスへの参画
  - マクロ：戦略策定（ガバナンス）への参画

ミクロ・レベルの目的

- ミクロ・レベルの「学生参画」の目的は，学生個人の学習成果を高めることである。
  - なぜなら，コーツ（Coates 2005: 26）が指摘するように，学習成果は「教育的に意味のある活動に各自がどのように取り組むかで決まる」ためである。
  - ミクロ・レベルの学生参画にピア・サポートを加えれば，他者の学習成果を高めることも主な目的となり得る。

メゾ・レベルの目的

- メゾ・レベルの「学生参画」の目的は，学生の声を教育評価・改善に活かすことである。
  - 学生の声を集める方法は，直接的（学生と教職員が直に意見を交換）なものと，間接的（質問紙調査などで意見を集約）なものがある。
    - 例えば，間接的な方法といえるNSSEの結果は，学生の現状を把握するだけでなく，教育改善の証拠に活用できる（Pascarella, et. al., 2010: 21）。
    - 直接的な方法には，外部評価への参加と内部評価への参加の二つがある。

マクロ・レベルの目的

- マクロ・レベルの「学生参画」の目的は，大学運営に学生の利益を反映させることである。
  - ただし，学生と大学の利害が対立する場合には，お互いの妥協点を見出すために，両者の対話が欠かせない。
    - 学生や大学だけでなく，社会の利益も考慮すべき。
  - さらに，学生が大学運営に関わることは，大学の意思決定のプロセスを透明なものにする（Lizzio and Wilson 2009）。

「学生参画」の定義

- ミクロ・メゾ・マクロ，それぞれのレベルの目的達成を強調しつつ，定義を試みたい（田中 2018: 19）。
  - 「学生参画」とは，①学生個人および同僚の学習成果を最大化する目的で，または，②大学教育の質を保証・向上させる目的で，あるいは，③大学の運営に学生・大学・社会の利益を反映させる目的で，学生が自らの労力や情報を大学に提供することである。

出典：田中正弘（2018）「日本の大学における学生参画―質保証への参画を中心として―」『大学研究』45，17-29頁。

英国における学生参画

筑波大学
University of Tsukuba

英国における学生参画

- 英国の「高等教育質保証機構」（Quality Assurance Agency for Higher Education: QAA）は，自らの「戦略2011-14」（Strategy 2011-14）で，内部質保証における学生参画の重要性を提唱するようになった。
- そこで，メゾレベルの学生参画に的を絞って，英国における学生参画の現状と課題を分析してみたい。

出典：田中正弘（2016）「質保証のための学生参画―イギリスの事例から」，山田礼子（編）『高等教育の質とその評価　日本と世界』東信堂，117-30頁。

戦略2011-14

- 戦略2011-14で，QAAは四つの目標を掲げている。その第一の目標は，「学生の要求を満たし，かつ，彼らに評価される」ことである。
  - この目標を達成するために，QAAは，

    ①全学生が可能な限り最高の教育経験を得られるように努める。
    ②大学が学生の期待を具体化し，その期待に応えられるように支援する。
    ③高等教育の水準と質について学生に明瞭に説明し，「パートナー」(partner)としての彼らと質保証の業務を協同して遂行する。
    ④学生の見解や多様な要求に応え，彼らの利害を保護する，

    と誓っている(QAA 2011)。

出典：田中正弘(2016)「質保証のための学生参画—イギリスの事例から」，山田礼子(編)『高等教育の質とその評価　日本と世界』東信堂，117-30頁。

学生が担うべき質保証の業務（1）

- パートナーとしての学生が担うべき質保証の業務は，大きく分けて二つある。
  - その一つは，QAAの外部評価団の一員として，大学評価に関わることである。
    - 2013年11月の時点で，QAAの「学生評価者」（student reviewer）に登録している学生は，（イングランド，ウェールズ，北アイルランド担当で）82名いる。

出典：田中正弘（2016）「質保証のための学生参画―イギリスの事例から」，山田礼子（編）『高等教育の質とその評価　日本と世界』東信堂，117-30頁。

学生が担うべき質保証の業務（2）

- もう一つの業務は，学生が①外部評価団に提出する「学生報告書」（student submission）を作成したり，②外部評価団と面談したり，③大学内部の質保証組織の正式な一員として参加したりすることである。
  - 上述した「③大学内部の質保証組織の正式な一員として参加」に関して，学生はどの組織の一員として，如何なる業務を期待されているのだろうか。

出典：田中正弘（2016）「質保証のための学生参画―イギリスの事例から」，山田礼子（編）『高等教育の質とその評価　日本と世界』東信堂，117-30頁。

筑波大学
University of Tsukuba

学生が提供できる情報

- 学生が提供できる（または，彼らの行動で示される）情報は，下記のようなものである（QAA 2012a: 2-3）。
  - 出願と入学の状況について
  - 高等教育への適応について
  - プログラムの計画・提供・運営について
  - カリキュラムの内容について
  - 教育方法について
  - 学習機会について
  - 学習環境について
  - 学生支援・指導について
  - 成績評価について

これらの項目には，学生の能動的な参画によって示される情報以外のものも多々含まれている。つまり，IR（institutional research）などで定量的に集められたデータ（学生の声）を教育改善に用いることも，広義の意味での学生参画といえる。

出典：田中正弘（2016）「質保証のための学生参画―イギリスの事例から」，山田礼子（編）『高等教育の質とその評価　日本と世界』東信堂，117-30頁。

学生が情報を提供しやすい環境の整備

- 学生が情報を提供しやすい環境を，大学は以下のように整備すべきである。

  ①質保証制度への自発的な学生参画を，学生の個人的・団体的意見の活用も含めて促進する。

  ②学生の賛同を得られた，学生代表の推薦・選任のための透明な仕組みを利用する。

  ③学生や教職員への研修や継続的な支援を，彼らの役割に則して提供する。

  ④質保証への学生参画に関する政策やプロセスの効果を，監視・批評・向上させる（QAA 2012a: 3）

出典：田中正弘（2016）「質保証のための学生参画―イギリスの事例から」，山田礼子（編）『高等教育の質とその評価　日本と世界』東信堂，117-30頁。

筑波大学
University of Tsukuba

学生参画の現状（1）

- QAAの報告書（2012b: 5-6）によると，多くの大学が学生団体との良好な関係構築に努力している。
  - 例えば，バッキンガムシャー・ニュー・ユニバーシティでは，「学生自治体を，学生の教育経験の全ての面を監視・改善する上での中核的なパートナーと見ている」。
  - ロンドン・サウスバンク大学では，「学生自治会との協同関係の下で，FD・SD部門の教職員が（授業改善などの）革新的プロジェクトを展開している」。さらに，委員会への学生の参加による教育改善を支援する，学生代表・民主化調整役のポストも新設した。

出典：田中正弘（2016）「質保証のための学生参画―イギリスの事例から」，山田礼子（編）『高等教育の質とその評価　日本と世界』東信堂，117-30頁。

学生参画の現状（2）

- 学生自治会と大学執行部が意見を交換する定例協議会の設置も，例えば，ダービー大学，ニューカッスル大学，ノッティンガム大学，ティーズサイド大学などで行われた。
- グロスターシャー大学では，学務理事が座長を務め，学生自治会長が副座長を務める，公式な組織である「学生委員会」（Student Affairs Committee）を設立している（QAA 2012b: 6）。

出典：田中正弘（2016）「質保証のための学生参画―イギリスの事例から」，山田礼子（編）『高等教育の質とその評価　日本と世界』東信堂，117-30頁。

学生参画の現状（3）

- 大多数の大学は，教務に関する最上位の意思決定機関である，「評議員会」（Senate）や「学術委員会」（Academic Board）などの投票権を持つ正規メンバーとして，学生代表の参加を公認している。
  - 特に，ロンドン・メトロポリタン大学とユニバーシティ・カレッジ・バーミンガムでは，教務に関する全ての審議委員会に学生代表が参加している。
    - ノーサンブリア大学の学生は，「教育改革について（教職員から）相談されたことや，業務の主な会議で学生を代表していた」ことに満足感を覚えたと回答している（QAA 2012b: 7-8）。

出典：田中正弘（2016）「質保証のための学生参画―イギリスの事例から」，山田礼子（編）『高等教育の質とその評価　日本と世界』東信堂，117-30頁。

学生参画の現状（4）

- 大学と学生が「学外試験委員」（external examiner）の報告書の勧告を共有することも，教育の質の保証・向上の観点から重要である。
  - バーミンガム・シティ大学では，「学生代表と一緒に，学外試験委員の報告書を議論する」制度が確立されている。
  - ノーサンブリア大学も，「学外試験委員報告書の勧告への対応を学生代表と教職員で協議する制度」を整えた。
  - オックスフォード・ブルックス大学では，オンラインで，学生と教職員が学外試験委員報告書への対応をそれぞれ書き込めるようになっている（QAA 2012b: 15）。

出典：田中正弘（2016）「質保証のための学生参画―イギリスの事例から」，山田礼子（編）『高等教育の質とその評価　日本と世界』東信堂，117-30頁。

学生参画の現状（5）

- 「全国学生調査」（National Student Survey: NSS）の活用も進んでいる。
  - ダービー大学では，教務に関する主要な委員会や学部・学科会議で，NSSの結果を分析した報告がなされている。
  - バークベック・カレッジでも，特にNSSで明らかになった問題点への対応が学部・学科会議で論じられている。
  - キングス・カレッジ・ロンドンでは，NSSの結果への対応を担う専門のワーキンググループを設置している。
  - ブリュネル大学では，「NSSを学内調査の基礎データとして活用」している（QAA 2012b: 16-17）。

出典：田中正弘（2016）「質保証のための学生参画―イギリスの事例から」，山田礼子（編）『高等教育の質とその評価　日本と世界』東信堂，117-30頁。

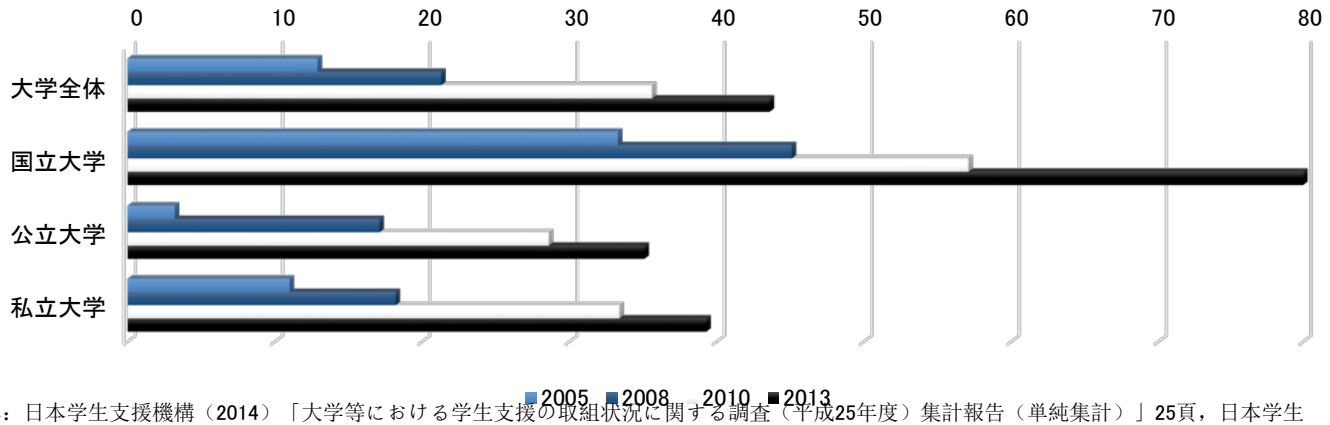
日本における学生参画

筑波大学
University of Tsukuba

日本における学生参画（1）

- 日本では，マクロレベル（ガバナンス）の学生参画は一般的ではない。
- ミクロレベルは，ピア・サポートなどの形で，2000年以降に急激に普及した。

図1：ピア・サポート等，学生同士で支援する制度の実施状況（学校種別）



出典：日本学生支援機構（2014）「大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成25年度）集計報告（単純集計）」25頁，日本学生支援機構（2011）「大学，短期大学，高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査（平成22年度）集計報告（単純集計）75頁を参考に著者が作成。

筑波大学
University of Tsukuba

日本における学生参画（2）

- メゾレベルでは，2000年代後半頃に，「学生FD」が，立命館などの私立大学に広まった（木野 2012）。
  - 木野（2012: 91–8）によると，学生FDとは，学生と教職員の懇談会（「しゃべり場」など），学生による授業紹介や授業改善の提案，学生による生活・学修環境改善の提案，学生FDの広報などの活動を含む。
- 学生FDの特徴は，大学の正式なメンバーではなく，ボランティアの学生で構成されていることである。

出典：田中正弘（2018）「日本の大学における学生参画—質保証への参画を中心として—」『大学研究』45，17–29頁。

ボランティア活動の利点・欠点

- ボランティア活動の利点は，①意識の高い学生で構成されること，②学生の主体性が尊重されること，③従来のFD委員会を改組しなくてもよいことなどである。
- 欠点は，①学生の改革案を学生が議決する権利（議決権）がないこと，②属人的な取組で永続性に問題があること，③学生FDは「楽しくなければならない」（大崎 2012: 143）ことなどである。
  - 楽しくなければならない理由は，権利でも義務でもなく興味で参加している学生をつなぎ止めるためである。それ故に，学生FDはイベント（お祭り）活動に偏る傾向が見られる。

出典：田中正弘（2018）「日本の大学における学生参画―質保証への参画を中心として―」『大学研究』45，17-29頁。

駒澤大学の学生FD

- 2019年1月30日（水）に，学生FDスタッフ（第3期）が，学長・副学長と意見交換会を行っている。

学生FDスタッフからは，「授業の抽選制度について再検討してほしい」「留学先で取得した単位の単位認定を柔軟に行ってほしい」等のカリキュラムに関することから，キャリアイベントや学食，施設・設備に関することなど，さまざまな意見が提案された。

出典：駒澤大学HP：https://www.komazawa-u.ac.jp/about/fd/fd-action/fd-student/30-opinion-exchange-meeting.html

筑波大学
University of Tsukuba

東洋大学の学生FD

- 2016年4月7日（木），8日（金）に，白山キャンパスの学修支援室にて，先輩による履修相談会を開催している。

履修相談会では，「先輩によるおもしろ授業紹介冊子WiLL」や学生FDチームのニュースレターが配布された。

2日間の開催で，250名を超える新入生が来場した。

出典：東洋大学HP：https://www.toyo.ac.jp/site/fd/109600.html

筑波大学
University of Tsukuba

大阪府立大学の学生FD

- 2018年7月5日（木）に，「しゃべり場」～君たちはどう学ぶか～を実施している。

「君たちはどう学ぶか」をテーマに，約20名ほどの参加者の方に加え、各学生団体の方を交えて議論を行った。なお，「しゃべり場」とは，大学生活を充実させるためにどのようなことをするべきなのかという意見を各グループで話し合うという企画のことである。

出典：大阪府立大学HP：https://www.fd-center.osakafu-u.ac.jp/2018/05/23/2018/

関西大学の学生FD

- 人間健康学部では，学部のFD活動に学生が参画して、教員・職員・学生が三位一体となって学部の教育の質の向上をめざしている。

＜学生と教職員によるFD活動の目的＞
(1)授業方法・授業環境改善などの教育の質的向上を図る。
(2)堺キャンパスの学生生活を活性化する。
(3)学生・教員・職員が協働し、共創する風土を築く。

出典：関西大学HP：https://www.kansai-u.ac.jp/Fc_hw/campuslife/fd.html

学生FDはPBL？

- 沖（2013）は，学生FDは，FD活動というよりも，大学教育の改善を課題とするPBL科目（アクティブ・ラーニング）の一種である，と批判した。
  - ただし，梅村（2012: 193）は，イベント活動の企画などの経験を通した各学生の人間的成長が目覚ましいことから，「一人ひとりの学生の成長が授業を変え，大学を変えていくと信じている」と述べている。
- 従って，学生FDという取組は，教育の質を保証する取組としては，まだ不十分であり，今後の改善が必要といえる。

出典：田中正弘（2018）「日本の大学における学生参画―質保証への参画を中心として―」『大学研究』45，17-29頁。

内部質保証への関与

- 筑波大学では2020年度より，学位プログラム（学類・専攻）ごとに設置される，プログラムレビュー評価委員会の正式なメンバーとして，学生（1～2名）が参画する予定である。
- 学生が参画することにより，プログラムの質の確認が可能となる。
  - 組織：三つのポリシーの明示を徹底した。
  - 学生：三つのポリシーなど聞いたことがない。

矛盾

筑波大学
University of Tsukuba

まとめ

学生は弟子，顧客，パートナー？

- 博士課程（研究学位）に所属する大学院生は，弟子と見なしてもよいと思われる。
  - 学生は研究者を目指して進学したのであるから，教員はその生き方を背中で語ればよい。
- 学士課程（非専門職コース）の学生は顧客と見なすべき。
  - 学生のニーズをくみ取り，それに応えなければ，大学（特に私立）は生き残れないため。
    - ただし，顧客はよりよいサービスを求めて，移動してしまいかねない。

筑波大学
University of Tsukuba

まとめ

- 学士課程の学生は，顧客としてだけでなく，パートナーとしても遇されるべき。
  - なぜなら，パートナーとして，自らの大学の教育改善に努めることは，自らの利益につながるだけでなく，所属意識が芽生える可能性が高いためである。
    - 所属意識の低い不本意入学などの学生の成績が低迷しやすいことは，様々な研究（例えば，中本・桜井2019）で指摘されている。
    - 所属意識の高い学生は，卒業後も，母校愛から同窓会などを通して，大学に貢献してくれることもある。

ご清聴ありがとうございました。

筑波大学
University of Tsukuba

参考文献（1）

- Brand, Stuart and Millard, Luke (2019) "Student Engagement in Quality in UK Higher education, More than assurance?", in Masahiro Tanaka, *Student Engagement and Quality Assurance in Higher Education, International Collaborations for the Enhancement of Learning*, London: Routledge, 35-45.
- Coates, H. (2006) *Student Engagement in Campus-based and Online Education: University Connections*, London: Routledge.
- Healey, M., Mason-O'Connor, K. and Broadfoot, P., (2010) "Reflections on Engaging Student in the Process and Product of Strategy Development for Learning, Teaching, and Assessment: An institutional case study," *International Journal for Academic Development*, 15(1), 19-32.
- 木野茂（2012）「学生FDサミット」木野茂（編）『大学を変える，学生が変える』ナカニシヤ出版，69-102。
- Kuh, G. (2001) "Assessing What Really Matters to Student Learning Inside The National Survey of Student Engagement", *Change: The Magazine of Higher Learning*, 33(3), 10-17.
- Kuh, G. (2009) "What Student Affairs Professionals Need to Know about Student Engagement", *Journal of College Student Development*, 50(6), 683-706.
- Levy, P., Little, S. and Whelan, N. (2011) "Perspectives on Staff-Student Partnership in Learning, Research and Educational Enhancement", Little, S. (Ed.), *Staff-Student Partnerships in Higher Education*, London: Continuum, 1-15.
- Lizzio, A. and Wilson, K. (2009) "Student Participation in University Governance: The Role Conceptions and Sense of Efficacy of Student Representatives on Departmental Committees", *Studies in Higher Education*, 34(1), 69-84.
- Maringe, F. (2011) "The Student as Consumer: Affordances and Constraints in a Transforming Higher Education Environment", Molesworth, M, Scullion, R. and Nixon, E. (Eds.), *The Marketisation of Higher Education and the Student as Consumer*, Oxford: Routledge, 142-154.
- Pascarella, E. T., Seifert, T. A. And Blaich, C. (2010) "How Effective are the NSSE Benchmarks in Predicting Important Educational Outcomes?", *Change: The Magazine of Higher Learning*, 42(1), 16-22.

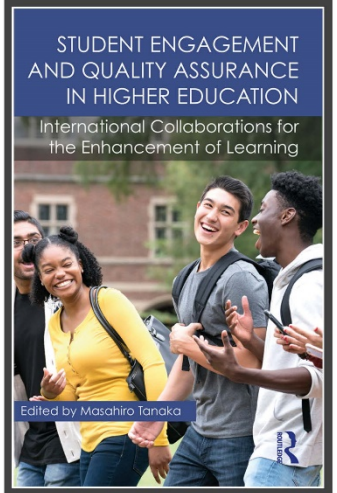
筑波大学
University of Tsukuba

参考文献（2）

- 中本陵介・桜井延子（2019）「外国語学部生のつまずき傾向の分析および支援策等に関する報告」『高等教育フォーラム』9，59-69頁。
- 日本学生支援機構（2011）「大学，短期大学，高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査（平成22年度）集計報告（単純集計）」
- 日本学生支援機構（2014）「大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成25年度）集計報告（単純集計）」
- 田中正弘（2016）「質保証のための学生参画―イギリスの事例から」，山田礼子（編）『高等教育の質とその評価　日本と世界』東信堂，117-30頁。
- 田中正弘（2018）「日本の大学における学生参画―質保証への参画を中心として―」『大学研究』45，17-29頁。
- Masahiro Tanaka (2019) *Student Engagement and Quality Assurance in Higher Education, International Collaborations for the Enhancement of Learning*, London: Routledge.
- Quality Assurance Agency for Higher Education (2011) Strategy 2011-14 (http://www.qaa.ac.uk/ AboutUs/strategy11-14/Pages/default.aspx).
- Quality Assurance Agency for Higher Education (2012a) UK Quality Code for Higher Education, Part B: Assuring and Enhancing Academic Quality, Chapter B5: Student Engagement.
- Quality Assurance Agency for Higher Education (2012b) Outcomes from Institutional Audit: 2009-11, Student engagement, Third series.

筑波大学
University of Tsukuba

広告です



January 2019: 234x156: 172pp
13 illustrations

Hb: 978-0-367-13282-8 | ~~£105.00~~ £84.00
Pb: 978-0-367-13283-5 | ~~£29.99~~ £23.99
eBook: 978-0-429-02564-8

TABLE OF CONTENTS:

Foreword Chapter One: The International Diversity of Student Engagement Chapter Two: Students as Partners in Swedish Higher Education – A Driver for Quality Chapter Three: Student Engagement in Finnish Higher Education: Conflicting Realities? Chapter Four: Student Engagement in Quality in UK Higher Education – More than Assurance? Chapter Five: Student Engagement in the United States: From Customers to Partners? Chapter Six: Old Technologies, New Opportunities: Rethinking Traditional Approaches to Student Engagement in Australia Chapter Seven: Student Engagement in Brazilian Higher Education and its Sociopolitical Dimension Chapter Eight: The Relevance of Student Engagement in African Higher Education: the Mozambican Case Chapter Nine: Student Engagement in Quality Assurance of Higher Education in Kazakhstan: Ambiguous Forms and Invisible Procedures Chapter Ten: Student Engagement in Chinese Higher Education Institutions for the Improvement of Educational Quality Chapter Eleven: Student Engagement for the Improvement of Teaching: The Peculiar Form of Student Faculty Development in Japan Chapter Twelve: Transformation toward Pro-Learning Outcomes in Japanese Higher Education Institutions: The Role and Challenges of Assessment for Student Engagement Chapter Thirteen: The Future of Student Engagement

20% discount with code BSE19*

Student Engagement and Quality Assurance in Higher Education

International Collaborations for the Enhancement of Learning

Edited by **Masahiro Tanaka**

Using a range of international examples to compare the reality, purpose and effect of student engagement in universities across the globe, this book argues that teachers and students need to collaborate to improve the quality of university education and student learning. With case studies from ten countries covering a variety of cultural and environmental settings, it focusses on ways of working with students to produce applicable, implementable strategies for universities the world over. This book is essential reading for educational researchers, institutional leaders and all concerned with the implementation and progression of student engagement and quality assurance in higher education.

** Offer cannot be used in conjunction with any other offer or discount and only applies to books purchased directly via our website.*

Routledge
Taylor & Francis Group

For more information visit:
www.routledge.com/9780367132835

貴学の図書館の棚に並べていただけたら，嬉しいです。

筑波大学
University of Tsukuba